

いては」といった経済政策の実際問題として論議がたたかわされてきている傾きがあるのにたいし、著者はさらに一步をすすめて、擴大再生産における第1部門のヨリ大なる増大率の必然性を理論的に立證しようと試みている點である。すなわち著者は、擴大再生産におけるマルクスの前提条件  $(V_1 + M_1) > C_2$  から出發し、これに労働生産性の向上→資本の有機的構成の高度化という条件を導入することによって、 $aP_1 > bP_2$  ( $a = \frac{V_1 + M_1}{C_1 + V_1 + M_1}$ ,  $b = \frac{C_2}{C_2 + V_2 + M_2}$ ) における  $a$  の漸減傾向と  $b$  の漸増傾向の存在を立證し、この不等式関係を維持するためには、 $P_1$  が  $P_2$  よりも急速に増大することが絶対に必要だとの結論をみちびきだしている。

第3章では、生産の増大が國民の消費水準の向上をもたらす具体的な形態としての「物價引下げの機構」を考察している。生産の増大が消費財の小賣價格の引下げという形をとってあらわれるまでには、きわめて多くの複雑な要因が介在しているので、この問題の解明は並大抵のことではないが、著者はあえて1) 物價引下げの具体的な方式(民間貨幣收支バランスと商品ファンド・バランスとの調整) 2) 工業物價の構造と物價引下げの源泉、3) 物價引下げの再生産機構(社會的總生産物および國民所得の再生産と流通の中における物價引下げの位置づけ) といったこの問題のもっとも主要な側面にいどんだわけである。社會主義經濟における、まさにこの部分の研究は、ソヴェトにおいてもそうであるが、とくにわが國では貧弱であっただけに、本章の貢獻は非常に大きいといわねばならぬ。ここでは消費者選擇の自由と需給の圓滑な調整、原價と價格の問題、價格における企業利潤と取引税の關係、社會主義經濟での賃金の意味、労働生産性と賃金上昇率との關係、蓄積と消費の關係など、實に興味深いさまざまな問題についての豊富で實證的な考察が加えられている。わけても貴重なのは、原資料のとぼしいなかで、著者が勞をいとわずかなり面倒な計算をかさねつつ、たとえば小賣商品の販賣高や小賣物價指數についての近似値をもとめ得ていることや、再生産表式の數字例をつかって、第1部門の優先的發展下における系統的な物價引下げの可能性を論證していることなどにみられる、著者の學究的態度である。もちろん本書は一切の問題にわたって十分な解答を與えてはいないし、國民經濟バランス論やその他にも主として問題の指摘にとどまっている部分が少なくない。しかし全體として、この研究は日本におけるソヴェト經濟研究が現在到達している最高の水準をしめすものといえよう。

なお本書には、以上の體系的なふくみをもった3つの章のほかに、補足として工業生産の管理機構にかんする

序論と、第1次—第5次5ヵ年計畫における工業統計資料を整理した補遺とがつけくわえられている。

(秦 正流)

ペ・イ・リャシチェンコ著

### 『ソ同盟國民經濟史』

第1巻および第2巻, 1952年; 第3巻, 1956年

Пётр Иванович Лященко, «История Народного Хозяйства СССР», Т. I и Т. II, 1952; Т. III, 1956.

リャシチェンコ(1876—1955年)のロシア經濟史といえは、ふるくは滿鐵調査部から出された平館利雄氏の譯で、また慶應書房から出された東健太郎氏の譯で、わが國にもすでになじみ深いものとなっている。しかしこれらの譯書は、いずれも著者の初期の勞作に屬する。すなわち『ロシア國民經濟史』《История Русского Народного Хозяйства》の初版が出たのは、1927年であって、1930年には、その第2版が刊行された。わが國に翻譯紹介されたものは、これらである。ついで1939年には『ソ同盟國民經濟史』《История Народного Хозяйства СССР》が出版された。これは、舊著を相當廣範圍にわたって書き改めたものであったが、残念なことに、當時の情勢のもとでわが國への紹介ははばまれていた。

ところが、この『ソ同盟國民經濟史』は、戦後になって根本的に書き改められ、これまで書かれたことのなかった1917年の革命以後の社會主義經濟の歴史があらたにくわえられて、全3巻の構成で刊行されることになり、1947年には第1巻が、1948年には第2巻が出版された。第1巻は、原始時代から1861年の農民改革まで、すなわち資本主義以前の時代をとりあつかい、第2巻は、それにつづく資本主義時代、すなわち1919年の社會主義革命までをとりあつかっている。これらの著作は、分量の點からみても、從來の著作のほぼ倍になっている。この新しい著作は、ソ同盟高等教育省によって大學用の参考書として認定され、1949年には、スターリン賞第1位をあたえられた。

ついで1950年にはこれの第2版が、1952年には第3版が刊行された。この第3版は、1947—1948年の第1版、1950年の第2版にくらべて、若干の増補改訂がくわえられている。これは、著者も言っているように、この時期にソヴェト歴史學界で提起されて解決された問題や、この著作にたいしてなされた書評や批判を考慮しておこなわれたものである。ことに1949年末から1951年初にかけてソヴェト歴史學界で展開された、ロシアの封建制

と資本主義との時代区分にかんする論争は、この著作の改訂に大きな役割をはたしたものと推察される。

ところで、第1巻および第2巻がすでに3版をかさねていた時期に、社会主義時代をとりあつかう第3巻は、まだ刊行されなかった。これは、著者の死後、1956年になってやっと出版された。これには、出版所のつぎのような前書がつけられている。「ながいあいの重い病氣とその後に来た死は、著者が本書の著述を完成するのをさまたげた。すべての篇が一樣に完全に仕上げられているわけではない。それにもかかわらず、當出版所は、本書が、現在の形でも、廣範な讀者層によっておおいに興味あるものであると、考える」と。

著者のロシア經濟史研究は、すでにみだように、1920年代からはじまっている。そして1917年までの國民經濟史は、すでに數回にわたって書き改められ、推敲に推敲がかさねられている。しかし社会主義時代の經濟史の著述は、著者にとってもまったく新しい、はじめての仕事であった。そのことが、他の2巻にくらべて、第3巻の出版がおくれている最大の原因であったであろうと思われる。著者自身はこう言っている。「すべての篇が十分に完全に仕上げられるまでにはいたらなかった。それは、若干の篇については、著者が必要な資料を利用することができなかつたからであり、また國民經濟のすべての問題がわが國の歴史學文獻、經濟史學文獻で十分に研究されているわけではないからである」と。このような条件にくわえて、著者の肉體的條件——高齡と病氣——もその仕事の進捗をさまたげた。こういうわけで、第3巻は、前の2巻ほどには著者の満足できる著作ではなかつたかもしれない。しかしそれにしてもわれわれは、この著作によって、原始時代のむかしから社会主義時代の今日までの人類社會の一貫した經濟的發展を、ロシア民族の歴史についてあとづけることができるのであり、この點で、80年のながい生涯をこの著作の完成に捧げられた著者にたいして、深い尊敬と感謝の念を禁じえないのである。

つぎに本書の内容を、目次にしたがって、簡単にみよう。

第1巻は、6篇、27章にわかれている。第1篇は、原始經濟、その解體と階級社會の形成をとりあつかい、(1) 古代(5—6世紀まで)の東部ヨーロッパ平原の諸民族、(2) ザカフカジェと中央アジアとの諸民族のもとにおける氏族の解體と奴隸制國家の形成、(3) ロシア・スラヴ諸種族の原始共同體經濟とその解體(6—9世紀)、(4) 東方スラヴの階級社會と國家の形成、の諸章からなる。第2篇は、古代におけるソ同盟諸民族のもとでの初期封建制をとりあつかい、(1) ソ同盟諸民族のもとでの封建

制經濟の一般的特徴づけとその特殊性、(2) 10—12世紀のキーエフ國家における封建的諸關係の發展、(3) 初期封建制の時代のザカフカジェと中央アジアとの諸民族、の諸章にわかれる。第3篇は、發展した封建制と封建的分裂の時期における封建=農奴制經濟をとりあつかい、

(1) 13—14世紀の東北ルーシの封建制、(2) 同時期における封建的都市およびその工業と商業、との2章からなる。第4篇は後期封建制の時期の封建=農奴制經濟と15—17世紀におけるロシア國家による封建的分裂の一掃の問題をとりあつかい、(1) 15—17世紀におけるロシア國家の政治的および經濟的發展の一般的性格、(2) 同時期における農業と農奴制的知行地、(3) 都市、工業、商業、(4) 17世紀のロシア國家の經濟、(5) 14—17世紀におけるロシア多民族國家の形成とその諸民族の經濟的發展、(6) 16—17世紀におけるポーランドの農奴制的壓制のもとでのペロルシアとウクライナ、の諸章からなる。第5篇は18世紀の絶対主義國家の時代におけるロシアの封建=農奴制經濟をとりあつかい、(1) 18世紀初頭の封建=農奴制經濟とピョートルの改革、(2) 18世紀第1四半期の農奴制工業とマニユファクチュア、(3) 18世紀第2四半期から18世紀末までの經濟と經濟政策、

(4) 同時期の農業、(5) 同時期の工業の發展、の諸章にわかれる。第6篇は19世紀前半における農奴制經濟體制の解體と農奴制度の崩壊をとりあつかい、(1) 19世紀第1四半期のロシアの政治・經濟狀態、(2) 19世紀第2四半期における農奴制の危機の深化と經濟政策、(3) 19世紀前半における農奴制の農業經濟、(4) 19世紀前半の工業と資本主義的マニユファクチュアの發展、(5) 18世紀と19世紀前半における非ロシア民族地區の經濟的發展、(6) 19世紀中葉における農奴制經濟の全般的危機、(7) 1861—1866年の農奴制度廢止と改革、の諸章からなる。

第2巻は4篇、23章からなる。第1篇は産業資本主義の時代をとりあつかい、(1) 産業資本主義發展の諸前提とその發展の一般的性格、(2) 改革後の農業、(3) 改革後の資本主義的マニユファクチュアと工場、(4) 産業資本主義のための國內市場の形成、(5) 90年代の工業と工業昂揚、(6) 産業資本主義の時期の國家經濟と經濟政策、の諸章にわかれている。第2篇は帝國主義をとりあつかい、(1) ロシアにおける資本主義の一般的特徴づけと特殊性、(2) 1900—1903年の恐慌と1903—1905年の不況、(3) 日露戰爭および1905—1907年の革命の時期におけるツァーリズムの社會的=政治的危機、(4) ストルィピンの反動と農村のブルジョアの改造、(5) 工業の集積と獨占體、(6) 金融資本とロシア工業、(7) 1909—1913:

年の工業昂揚と 1900—1914 年の帝國主義の時期における工業の發展の總括、の諸章からなる。第 3 篇は 19—20 世紀のロシア資本主義體制内における諸民族の經濟的發展をとりあつかい、(1) ロシア資本主義の多民族的體制と非ロシア民族地區のそれへの加入、(2) モスクワの資本主義工業を例とするロシア民族資本の起源と進化、(3) 資本主義時代におけるヨーロッパ・ロシアの非ロシア民族諸州の國民經濟、(4) 資本主義時代におけるバシキリア、カザフスタン、キルギジアの國民經濟、(5) シベリアとシベリア諸民族との經濟、(6) トルケスタンの國民經濟、(7) 資本主義時代におけるカフカズの諸民族の經濟、の諸章からなる。第 4 篇は 1914—1917 年の帝國主義戦争およびツァーリズムと資本主義との崩壊をとりあつかい、(1) 第 1 次世界大戰にたいするロシアの政治的および經濟的準備、(2) 第 1 次世界大戰における國民經濟と軍事經濟、(3) 臨時政府と國民經濟の崩壊、ブルジョア權力の打倒と社會主義革命の勝利、の諸章からなっている。

第 3 卷は 3 篇 11 章からなっている。第 1 篇は 10 月革命から國民經濟の復興までの時期をとりあつかい、(1) 10 月革命の遂行と社會主義建設の第一歩、(2) 内戦と外國干涉の時期の國民經濟、(3) 復興期の國民經濟、の諸章にわかれている。第 2 篇は、工業化の開始から國民經濟の社會主義的改造の完了までの時期をとりあつかい、(1) 社會主義的工業化の開始、(2) 第 1 次 5 年計畫期における社會主義工業の建設、(3) 農業の社會主義的改造と全面的集團化、(4) 第 2 次 5 年計畫期における國民經濟と社會主義的改造の完了、(5) 第 3 次 5 年計畫の平和期における國民經濟、(6) ソヴェト權力の民族政策とソ同盟の單一總合經濟體制の建設、の諸章にわかれる。第 3 篇は祖國戦争期の國民經濟と戦後の國民經濟復興發展の 5 年計畫をとりあつかい、(1) 祖國戦争期の國民經濟と、(2) 戦後 5 年計畫 (1946—1950 年)、との 2 章からなっている。

なお結びにおいて、1951—1955 年の國民經濟の發展が概観されている。  
(飯田貫一)

## Résumé of Articles

### OTSUKA, Hisao, "The Historical Patterns of 'Manufacture'"

In economics, it is usual to call the era of about two centuries, from the middle of the 16th to the latter half of the 18th century, as the age of "manufacture", and the theory that regards the management form of "manufacture" (manufactory) as the dominant feature of capitalist production of that era, lends itself as influential. However, from the side of economic history, that opinion is often criticized upon the basis of the historical facts, and the theory that the putting-out system was rather dominant in that era and "manufacture" was nothing but the fortuitous or exceptional phenomenon seems to be more

prevailing. Could the theory, alleged to be based upon the positive evidences, be justified? Is the method of proving adequate enough? The writer myself incline to be negative against that.

If so, what kind of method I should take to dissect "manufacture" from the knots of the historical facts and measure correctly the degree of its development. To answer such problem, I have considered, in an other paper the method to dissect "manufacture" from the quantitative point of view of the numbers of the employed. But, since that is hardly adequate, I have tried in this paper to compose the most fundamental pattern of "manufacture" that appeared in the complexities of